



# みすず

## 目次

館長に就任して	図書館長 丸山 信…………… 1
戦後五十年偶感 ー私の一冊の本ーアルト・ハイデルベルク	学 長 京極 興一…………… 2
専門書にチャレンジ	小林 真…………… 4
あなたへの一冊 私を励ましてくれる本『大人になる本』	宮川 則子…………… 6
詩の魅力	幼児教育科 2年 串田 馨子…………… 7
読書の理由	国文科 2年 玉城 裕子…………… 8
児童文化研究大会に参加して	幼児教育科 1年 竹村 美和…………… 9
読書から得た愛	国文科(平成元年度卒) 秋本 幸子…………… 10
〔図書館ガイド〕……………	…………… 11
図書館ニュース……………	…………… 12

## 館長に就任して

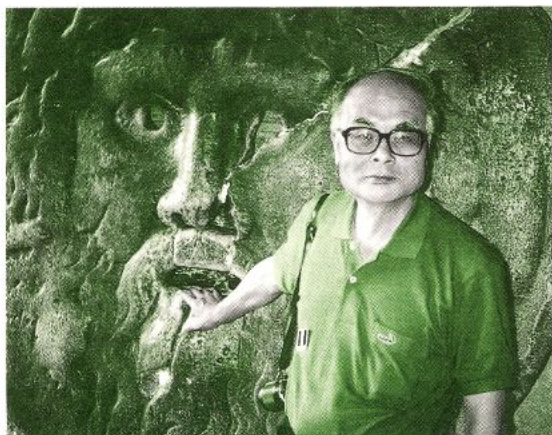
館 長  
丸山 信

今年度から、山口先生の後を継いで、図書館長を勤めることになりました。「大学図書館は、大学の心臓」と、いわれてきています。人間の身体でも、心臓はもっとも大事なものの一つです。大学における教育や研究に必要な資料・情報を収集し、組織し、学生・教員に提供し、それぞれの学習や研究に寄与するという大学図書館の使命をよりよく果たしたいと思います。

最近、1・2年生の私の図書館学の講義を聞く学生160数名に、図書館に対する希望をアンケート調査したところ、「新刊はなるべくはやく購入して欲しい」「蔵書を増やして欲しい」「開館時間を延ばして欲しい」「図書館員は笑顔が……」など多くの希望がありました。

資料・情報・多様化した今日、資料・施設の充実、業務の機械化、学術情報のネットワーク等の拡充・向上に真剣に取り組んでゆきます。

皆さんの協力・応援もぜひお願いしたい。



ローマにて

丸山 信館長

戦後五十年偶感

# 私の一冊の本 アルト・ハイデルベルク

学長 京 極 興 一

● 今年は戦後五十年、いろいろな記念行事が行われた。私は、マスコミに報じられるそれらを見ながら、とりわけ昭和二十年(1945年)の敗戦前後の激しい混乱を思い起していた。

福沢諭吉は、  
一身にして二生を経るが如く、一人にして  
両身あるが如し(「文明論之概略」明治八年)  
といている。三十三歳の時に明治維新を目の  
あたりにした彼が、封建時代の幕臣としての前半生と、  
文明開化の新時代の自由人としての後半生とを、  
別々の人生だったといったのは、まさに実感であ  
ったろう(ちなみに、福沢は、六十六歳で没した)。

● 戦時下に少年期を過ごし、戦後の変貌を見てきた私としては、「二生を経るが如し」という福沢の言葉に強い共感を覚える。ここでは、私の前生ともいべき五十年あまり前のことの中から、一冊の本にまつわるささやかな思い出を手繰り寄せてみたい。

戦争末期、私は中学生から高校生になったばかりであった。ある親戚の家を久しぶりに訪問した時のこと、蔵書の整理をしていた従兄が、君もこれからはこんな本を読んでみたらと言いながら、私に一冊の岩波文庫を手渡した。その時、この本は、間もなく兵隊として戦地に行くはずの彼の遺品になるかもしれない、という思いが私の心をかすめた。徴兵と戦死が、もはや日常茶飯事的な時代であった。こうして私が手にした一冊の本は、当時読んだ感動をそのままに、今日までの長い歳月を通しての愛読書となった。

さて、その本は、ドイツの作家マイアーフェルスターが自作の小説を戯曲化した「アルト・ハイデルベルク」(1901年)、番匠谷栄一氏の名訳である。その後、小説も同氏によって翻訳されたが、他に、少年少女向けの翻訳が幾つかある。劇としては、ドイツでも日本でも回を重ねて上演され好評を博した。

● ザクセン州カルスブルク公国の公子殿下カル・ハインリヒは、1年間の予定で伝統あるハイデルベルク大学に入学することになった。風光明媚なハイデルベルクに到着し、宿舎に入ろうとする時、学生の集まる酒場の人気者、可憐な娘ケーティーは、花束をささげ歓迎の詩を朗誦する。

遠きくによりはるばると  
ネカーの河のなつかしき  
岸に来ませるわが君に  
今ぞささげんこの春の  
いとうるわしき花かざり。  
いざや入りませわが家に  
さわれ去ります日もあらば  
しのびたまわれ若き日の  
ハイデルベルクの学びやの  
幸おおき日の思い出を。

このようにして始まったカル・ハインリヒの学生生活は、それまでの宮廷での窮屈な生活から解放され、学生たちの中で自由を満喫し、ケーティーとの恋に陶酔する日々であった。ところが、その生活も大公の急病と死によって中絶する。そして、大公の位に就いた彼に、妃を迎える日が近付いてきた。そのようなある日、彼は急に思い立ってハイデルベルクを訪れる。しか

し、そこには、もはやかつての学生生活はなかった。学生は友人としてではなく大公としての彼に接し、ケーティーとの恋も終わりの時が来た。彼の青春アルト・ハイデルベルク（懐かしのハイデルベルク）は、もの悲しげな学生の合唱のうちに幕を閉じる。

ああなつかしき青春の  
 榮ある愉快<sup>はえ</sup>まいずこ  
 心のままに興じたる  
 こがねの時よ玉の日よ  
 いまし帰らずそのあとを  
 求めてわれはなげくのみ

ああうつりゆく世のすがた  
 ああうつりゆく世のすがた  
 これは、カル・ハインリヒの束の間ではあつ

たが「人間」として生きた青春の物語。私は戦時下の陰鬱な空から射した一筋の光のようなきらめきを感じたことを思い出す。

● 過日、本学に北野講堂が竣工し、記念行事として音楽会や講演会が行われた。そこに出席したある女性が、「まるで、アルト・ハイデルベルクを思い出すような雰囲気ですね」といわれた。そのような連想は、私に思いもかけないものであったが、いわれてみると、この講堂には、よき時代のよき学生生活の舞台を想わせるものがあるような気がする。嬉しい言葉であった。

「こがねの時よ玉の日よ」の青春が、ここに繰り広げられるとしたら、それはなんとすばらしいことか。 (教授)

## 本学の先生方の近刊書

平成七年中に発行された本学の先生方の近刊書（単独、共著、分担執筆含）  
 一 氏名の五十音順

- 『俳文学大辞典』 角川書店 一八、〇〇〇円  
 長田 真紀先生 分担執筆
- 『上田小県誌』 第六卷 歴史編上（一）考古 小県上田教育会 六、〇〇〇円  
 吉川弘文館 九、〇〇〇円
- 『日本古代遺跡辞典』 両著とも 塩入 秀敏先生 分担執筆  
 風間書房 五、九七四円
- 『和歌文学論集五 屏風歌と歌会』 西山 秀人先生 分担執筆
- 『人物書誌大系30 福澤論吉門下』 日外アソシエーツ 一二、八〇〇円
- 『丸山信著作集「八角塔の窓から」』 慶応通信 二一、〇九〇円  
 両著とも 丸山 信先生 著
- 『図説 奥信濃の歴史』 郷土出版社 七、八〇〇円
- 『長野県美術全集 第五巻』 郷土出版社 二〇、〇〇〇円  
 両著とも 山本 秀磨先生 共著
- 『一茶新改』 若草書房 六、八〇〇円
- 『一茶辞典』 おうふう 一九、〇〇〇円  
 前著 単独著書 後著 共著 矢羽 勝幸先生 著

# 専門書に Challenge!

小林 真 (幼児教育科)

このページを開いてくれた皆さんに、私からぜひともお願いしたいことがあります。それは、図書館の本をどんどん利用してほしいということと、それも専門書をもっと手にとって読んでみてほしいということです。特に幼児教育科の皆さんに、声を大にして訴えたいのは、“堅い本に強くなろう”ということなのです。

私が見たところ、保育関係の実技科目で発表会の準備をしなければならないときや、実習に出かける前には、大勢の学生が図書館を訪れます。どうやら、絵本や紙芝居を選んだり、手遊びや歌、制作活動のネタが載っている本を探しているようです。このように、すぐ役立つ本、何かのやり方が書かれている本を、how to (ハウツー) 物の本といいます。

もちろん、子どもたちに初めて接するのに、何の準備もしないわけにはいきません。それに、皆さんの手持ちのネタがそんなにたくさんあるわけでもありません。こうしたすぐに役立つ本も必要です。むしろ、学生の皆さんの必要性からいえば、授業では覚えられないような様々な how to 本がたくさん揃えてあることは、保育者を養成する上でも重要なことだと思います。

でも…。実用性ばかりを重視した品揃えでは、大学図書館としては片手落ちになってしまいます。よい教育・保育実践の背景には、必ずしっかりとした理論的な裏付けがあります。保育の実

践の中で、いったいなぜこのような材料を使ったのか、どうしてこのような関わり方をしたのか、皆さんは自信を持って他の人に説明ができますか。ただ適当に、おもしろそうだから、あるいは自分にもできそうだから、という理由で材料を選んでいませんか。しっかりした根拠がなければ、りっぱな教育・保育実践はできません。

人間を育てるということ、あるいは施設の人々の生活を援助するということは、保育者の側にしっかりとした人間観がなければ努まるものではありません。教員免許や保母資格を取得するためには、そのために専門の基礎的な知識を身につけることが義務づけられています。子どもの発達の様子をしっかりと見極めたり、行動を形成したり修正したり、子どもたちに関わるための技術を学ぶためには、自分なりの子ども観・人間観をもち、その人なりの関わり方のスタイルを確立していかなければなりません。だからこそ、理論的な勉強が必要になってくるのです。

人間を育てる(教育)とは何か、あるいは福祉の精神とは何か、こうした理念は時代によって様々に変化してきました。様々な理念や時代精神の移り変わりを学んだり、関わり方の根底にある理論を学ぶためには、どうしても専門書を読まなければなりません。

ところが、理論的な内容を書いた本は、その多くが専門用語をたくさん使って、論文調の堅い文体で書かれています。皆さんのレポートの中には、「です・ます」調の口語体で書かれたものも見受けられますが、本来論文というものは、「である」という言い切りの形で文章化されています。皆さんの場合には、どうも、それ



だけで拒否反応を起こしてしまったり、頭の活動がお休みしてしまう人が多いようです。でも、そのままでは結局専門分野の理屈を身につけないうまま、とりあえず目先の技術(how to)だけをいくつか身につけただけの保育者や介護者になってしまいます。

たとえば、みなさんが卒業して、保育の現場や福祉施設に勤めた場合のことを考えてみましょう。勤めてから最初の1~2年は、わからないことばかりで、毎日の仕事に追われるでしょう。そして、必死になって周りの先輩達の見よう見まねをしながら、保育技術を身につけることで過ぎてしまうと思います。しかし、3年が経ち4年が経つ内に、果たして自分のやっていることはこれでよいのだろうか、と疑問を持つ日がやってきます。先輩の保育者たちにも、ああ、大学時代にもっと勉強しておけばよかった、と悔やんでいる人たちがたくさんいます。

でも、現場に出てしまうと、もう一度ゆっくりと保育理論や発達心理学の勉強をするゆとりがありません。何か調べたいと思っても、手元にあるのは保育・福祉関係の雑誌であったり、保育技術の how to 本ばかり、ということにもなりかねません。それでも大学時代のテキストは、何かの役に立つかもしれません。こうしたテキストは、専門分野の初歩的な内容を概説したものですから、ないよりはきっとましだろうと思います。

でも、もっと詳しく知ろうと思ったら、ある程度難しい本にも挑戦してみなければなりません。専門書というのは、値段が高いですから(あまりたくさん売れるわけではないので…)、何冊も買って手元に置いておくのは無理でしょ

う。そうだとすれば、できることは一つです。大学の図書館で借りて、読んでおくことです。必要なところはメモに取っておきましょう。場合によっては、一部分をコピーしてもかまいません。とにかく、保育に関わる理屈の部分について、手元にいくつかの資料を残しておくべきです。短大にいる間は、もしかしたらすぐに使う必要はないかもしれませんが。でも、知りたくなったときにいつでも手元に参考資料がある、ということは、後になってどんなに役立つかわかりません。

特に、保育関係の統計資料や専門の事典・辞典類は、大学の図書館でなければ手に入らないでしょうから、必要に応じてメモやコピーを活用することをおすすめします。それから、保育を志す人には、遊びの発達に関する本や、問題行動への対応に関する本(臨床心理学的な分野)、発達の障害についての基礎知識の本がぜひ必要でしょう。福祉の道に進む人には、老人の発達や、ノーマライゼーションと呼ばれる障害を持った人の社会参加と自立に関する本は必携だと思います。

だからこそ、漢字が並んでいたり、カタカナや横文字がたくさん書いてあったとしても、それに負けずに、専門の本にどンドンチャレンジして、理論をしっかり身につけて欲しいのです。そうすれば、常に自分の原点に戻って、保育の方針を導き出すことができるはずです。難しくても、専門書に Challenge してみましょう。

おわり!

(講師)

あ	な	た	へ	私を励ましてくれる本『大人になる本』
の	一	冊	②	

宮川則子

これまで様々な出会いの仕方、多くの書物にめぐり合ってきた。

友人が「読んでみて。」と貸してくれたもの、恩師から薦められたもの、知人から「こういう本があるのよ。」と教えられたものなど、その時自分が読んでいるものとは、全く異なった分野の書物に、私はよく、そんなふうにして出会ってきた。そしてその本は、自分では見つけ出せそうにないものであったり、また、その時の自分が必要としているものであったりすることがしばしばであった。

パット・パルマー原作の『おとなになる本』も、このようにして出会った、私にとって大切な一冊である。これは、仕事に直接関わりのある書物ばかりを探し回っていた時、学生が「もしよかったら読んでみて。」と、持って来てくれたものである。

「大人になるということは、夢を捨てることではない。大人になるということは、現実の中から具体的な道を探し出し、夢と現実のギャップを埋めていく方法を知ることでもあるんだ。」  
「うづくまって悲しんでいても、道を探すことはできない。立ち上がって、あたりを見まわしてみよう。」「あなたの中の理想主義者……あなたの中の批評家……あなたの中の悲劇の主人公……あなたの中の夢想家……あなたを苦しめているこれらの敵は、あなたが生みだし、あなたが育てている。あなたが彼らの声に耳をかたむければかたむけるほど、彼らはどんどん大きくなって、あなたを飲み込もうとする。だけど、彼らを上手にコントロールすれば、彼らはあなたの中に向上心や客観的な視点や、自分を大切にすゝる気持ちを育ててくれる。忘れないで。彼らをコントロールするのはあなたなんだ。」

やさしいことばで語りかけ、忘れかけていた大切なことに改めて目を向けさせてくれるこの本は、気持ちが落ち込んだ時の私の頼りである。何かをすればするほど自分の力のなさを思い知らされる。周囲の人々が皆優れて見える。劣等感のかたまりのようになり、そんな自分が嫌いでたまらなくなる。その裏返し——劣等感の裏には、自尊心に振り回されて自分の負けを認められない自分自身の姿が見える。ますます自分がいやになる。肩の力を抜き、ありのままの姿で生きていけば、きっともっと楽になるだろうとわかってはいても、長い間に培われた性分というものはなかなか変えられない。そんな時、「自分を好きになりなさい。」と声をかけ、落ち込んでいる暗い穴の中から私をひきずり出してくれる。それがこの本である。「自分に価値がないと思うと、人間は自分で自分を破壊してしまうことだってある。ありのままの自分を受け入れて、欠点も長所もあるじぶんというものを大切にしよう。まずあなたが、あなたの最大の味方にならなければ、ほかの人だってあなたの味方にはなれない。」

小林登著の『こどもは未来である』は、息子たちを出産した時にお世話になった医院の院長先生から紹介されたのものである。これもまた、子育てを始めたばかりの頃から今までずっと、私の側で私を励ましてくれていた本である。これを読むたびに思う一生まれただけに感動し、育つことに希望をもち、今ある自分に喜びを感じることができたら幸せであると……。

自分を励まし助けてくれる書物にめぐり合いながら、それを私に運んで来てくれた人との出会いがそこにあることを思い、またひとつあたたかさを感じてページをめくっている。(兼任講師)

## 詩の魅力

**私**は、読書といえば小説を主に読んでいた。ある日この詩を知ったのは、日曜日のラジオの詩のコーナーで、両親が聞き、とても感動したことからである。そして一生懸命本屋で探して購入し、この本を読んでごらんとプレゼントされたのが、詩というものを知るきっかけとなった。小説はとても楽しく、自分もその中の主人公になって読めるが、架空の人物だからと考えてしまうと、読み終わってからの感動や楽しさは一時的なもので、その余韻が残ったのはほんの数冊だった。でも、詩というものを知るきっかけとなった詩集は、相田みつをの「人間だもの」である。

**詩**を初めて書いたのは小学校1年生の時に、「先生あのね」という題で6歳年下の妹のことを詩にした。それから学年が上がっていくと、年に2~3度は必ずといっていいほど年代にあった詩を書いたり、読んだりしたけれどこの詩を読んで自分のものとは全く違うものを実感させられた。彼の詩は大人になっていく上で私の人生観に感動を与え、大事な詩集にめぐり会えた。

**詩**に対して子どもの頃は、見たもの聞いたことをただ書いていた。しかし中学生になってから今日まで、詩を素直に書けばいいのに架空できれいに飾ろうとして書いていた。他の詩集も読んでみたけれど、自分の気持ちを飾って読者にきれいに語ろうとしているように思えた。相田みつをの詩を一つ一つ読んで他の詩集と比較すると、すごく奥が深いけれど現実的で、作者のこれまでの人生に飾りがなく見栄もない素朴であって、見たもの思ったことをそのまま詩にしているので、自分に置き換えて読める本である。日常生活に起こる出来事がそのまま詠まれているので、自分でなるほどそうだと納得し

たり共鳴できるところがたくさんあり、どんどん詩の中に引き込まれていく気がした。なぜ自分の詩はきれいに書こうとするのかと何度も考えた。

**自**分の今までの私生活や学校生活を含む人生の中で、やはりぶつかることを避けては通れない。自分の希望や思い通りになったことなど一度もない。それが本当の人生であるのに、どんどん安全なところへと逃げてしまう。失敗したり恥をかいたりするのが怖いという思いが心の奥にあったから、きれいに書いていたのだと思う。この詩を読んで私は初めて、恥をかいても恐れてはいけない、失敗してもその繰り返しを幾度あっても、自分自身の苦しさに耐えることが自然であって強い人間になれる、そして暖かい人間にもなれる。それが人生の中で幸せになれることではないかと思った。

**相**田みつをの詩は、自己を振り返ることができ。そしてこれからの人生はこうでなくてはいけないと、自分と本がお互いについて語り合えるのが詩の魅力ではないかと思う。そしてまた、他の詩集に出会えばまた違った楽しみや奥の深さが実感されるのではないかと、いつもワクワクする今日この頃である。





## 読書の理由

**司**書課程の授業で本についてのアンケートを行ったが、その集計に携わるようになった。アンケートというのは、自分一人では見えなかった部分が見えてくる。この集計をしていて考えさせられる点があった。

「**最**近読んだ本は？」という欄には、同じ回答がないほど様々な本が列挙されていた。さすがだ、というのが素直な感想であったが、「読書をしないう理由」として挙げられたものが気になった。時間がない、興味がない、といった理由が多く挙げられ、特に、何を讀んでいいかわからない、本を讀む時間を他のことに使った方がいい、という理由を見た時は集計の手がふと止まるほど、心にひっかかりを感じた。

**正**直に言えば、私の気持ちの奥にも潜んでいけると言える要素である。時間がないというのは言い訳だ、とよく言われるが、何を讀んでいいかわからないというのは、自分が何を讀みたいのかかわからない、ということであろうから、読書のしようがないように思われる。本を讀む前から、読書に対してあきらめの気持ちを持っているかのようだ。

**と**りあえず読んでみる、という考え方も一つの方法かもしれない。つまり、興味をもってから読書をするのではなく、読書をして興味を探す方法もあるのではないかと。面白いとも感じない本では、活字を目で追う運動も苦痛であろう。そんな本に出会ったら、それは本と読者の相性が良くなかったのだ。そのことで本の存在、読書そのものを否定せず、とにかくページを開いてみればよいと思う。せっかく本は溢れるほどあるのに、開いてみないのでは何も始まらない。ページを開いたが最後、終りまで読まなくてはいけないというわけではないのだか

ら。もちろん、数行読んだだけで、本の世界に引き込まれることもあるはずだ。そんな本に出会えたら幸いである。

**本**を讀む、ということを重ね々しく大層なことだと考えすぎなのではないだろうか。面倒くさいと言っている人達でも、眠るのも食べるのも忘れる勢いで本を讀んだ経験があると思う。どんな楽しさ、面白さを得られるか知っているはずなのだ。私は、何度でもそんな実感を味わいたいから本を讀みたいと思う。

**本**を讀むのに、立派な理由などいらないのである。気軽な気持ちで十分と思う。他にしたい事があるなら、その時間を割いてまでしなくてもよい。しかし、自ら本との出会いのチャンスをつぶすようなことはしたくない。いつでも本に対して、読書ということに対して、オープンでいるべきだ。

**読**む前の心構えより、讀んだ後の充実感をもっと求めていたいと思う





# 児童文化研究大会に参加して

幼児教育科1年 竹村美和



私は小さな頃から物語が大好きだった。そのため、今回の松岡先生の「物語を生きるための物語」という講演にとっても興味を持っていた。

講演は「小鳥になった妹」というお話で始まった。松岡先生の話し方はとてもやさしく温かい感じでお人柄が感じられた。私はこの話をどこかで読んで知っていたが、少しもあきずに楽しく聞くことができた。この話はチベットの昔話ということだった。物語はどこの国にもあり、人間は物語好きであるらしい。

人間は自分の人生の先がまったくわからないため、他人の人生を物語にし、それを読んで自分の人生の糧にする。そのため、人間は物語好きになるのだと松岡先生はおっしゃられた。私がびっくりしたのは、今話題になっているオウム真理教を例に挙げられたことだ。オウムも物語ととらえられ、人が非常に興味を持ったのは、今までに考えられなかった物語だからだという松岡先生の考えに驚きながらも、私はどこかで納得することができた。

それから、現代の子どもの物語との出会いについての問題点をいくつも挙げられた。これは納得するものばかりで、子どもへの物語の与え

方について考えさせられた。講演の終わりは「ネズミとりやのむすめ」という物語だった。初めて聞く物語でとてもおもしろかった。内容的にももちろんだが、やはり松岡先生の語り口がその大きな部分を占めていると思う、物語の場面が次々と頭に浮かんで来る話し方であった。私も幼稚園であのような話し方で子どもに語り聞かせが出来たらいいなと思った。

この講演会は、初めから終わりまで興味を持って聞くことができたよい講演であった。講演が終わりふと演題を思い出したのだが、「物語を生きるための物語」の最初の「物語」は「人生」に置き換えられると気が付いた。

その後にあった分科会で、私は第二分科会の「自ら心を動かして遊びに打ち込む子どもを求めて」に出席した。付属幼稚園の先生達が、子どもにどのような援助をしているのかという内容だった。私がこれから実習をするにあたり、参考になることばかりだった。なかでもポツンと一人にいる子の接し方について深く考えさせられた。また、全てにおいて一番に考えなければならないのは“子どもの気持ち”だということに改めて確認することができた。この先いつまでも心にとめて置かなければならないことだと思う。



## 読書から得た愛

国文科(平成元年度卒)  
秋元 幸子

私が小学生の時に読んで忘れられなかった漫画本がある。その本には原作になった小説があって、短大生の時に市立図書館で見つけて夢中になって読んだ。それはフランスの作家セルジュ・ゴロンとアン・ゴロンの「アンジェリク」という小説である。

この話は十七世紀のフランスの貧乏貴族の娘アンジェリクの少女時代から始まる。姉妹の中で特に美しかった彼女は、片足の不自由な大貴族と政略結婚をする。新婚の彼女は少しずつ夫に惹かれていくが、夫は無実の罪で国王ルイ十四世に捕まり、処刑されてしまう。そして夫の財産全てを失った彼女も、その他の宮廷貴族の陰謀に巻き込まれ、幼い子供と共に乞食の身にまで堕ちてしまう。

けれども彼女は不屈の勇気と才覚で商人として成功し、かつての貴族としての生活を取り戻す。だが、宗教戦争に加担し国王に反発し、再び一般庶民として生活する事になる。そんな時亡くなったはずの夫が生きていると知り、単身で外国へ旅立つ。その後もいろいろの苦難に出会うのだが、夫と再会することができ、アメリカ大陸へ自由を求めて行くというスケールの大きい話である。

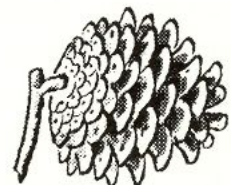
この話を読んでまず感じるのは、彼女が貴族の家に生まれながら庶民のように慎ましやかに暮らしていたため、どこにでもいるような好奇心の強い明るい多感な少女であるということだ。

そんな貴族らしくない彼女が、大貴族の夫と結婚して一流の貴婦人としての感性と知識を身に付けていく。それが突然の夫の処刑によって、これまでの守られた華やかな生活から、頼る者もない状態へと一転する。父親から戻ってくるようにと言われても、子供に夫の持っていた財産と地位を取り戻すという信念から、たとえどんなことをしても成し遂げようという強い意思を持った女性へと変わっていく。そういう彼女は幸せだった以前の彼女と同じ人物とは思えない、強い精神力と男性顔負けの行動力を見せてくれる。

そうかと思うと、彼女は子供達に対しての母性も同時に持っているのである。子供の世話をしながら、自分の幸せを感じることでできる女性らしさが出ている。そういう面は、彼女が庶民のように暮らす時に折々見られるのだが、母親の愛の深さがどんなものかを感じとれると思う。

彼女の波乱の人生は、富や権力や地位だけでは得られない物があることを暗示している。彼女の世俗的成功は、彼女の幸せをもたらすものではなかった。人並外れた行動力の結果、世俗的成功からは遠ざかっている時もしばしばあった。しかし彼女にとっての幸せは家族と一緒に暮せることだったのである。

彼女の生き方は、大変激しいものでとても真似できるものではないが、平凡に見える生活を大事にしていこうと感じた。





## 【図書館ガイド】

## 図書館は利用者のプライバシーを守る

今年には戦後50年を経て、図書館界にとってもいろいろと意義ある年であった。

まず、年初めに起きた阪神大震災、そして世にも恐ろしい「オウム真理教」関連の事件が次々と明るみに出た。

中でも、3月20日に発生した「地下鉄サリン事件」に関連して、4月6日国立国会図書館の利用記録53万人分が捜査機関の手により押収されるということが起きた。

これは一連の「地下鉄サリン事件」に関連して薬物密造に関係する文献を国会図書館にて利用、複写したのではないかとの疑いによるもので、刑事訴訟法197条2項に基づくものであったということである。

当初、国会図書館側は『図書館の自由に関する宣言』をふまえて、利用者の秘密の保持に努める館の方針を説明し、協力は出来かねると答えたが、4月6日、差押許可状（令状）をもって警視庁担当者が来館、過去1年分の利用申込書53万人分、資料請求書75万人分、資料複写申込書30万人分を段ボールに詰め2トントラックで搬出した。

そして、5月末被疑者1名を特定したとして、請求書5枚、複写申込書2枚を抽出して、6月末に残り全部が国会図書館に返還された。

\* \* \*

ここで問題となるのは「読者が何を読みたいのかは、その人のプライバシーに属することであり、図書館は利用者の読書事実を外部に漏らさない」としている前述の宣言である。

但し、憲法35条に基づく令状を確認した場合は例外とすることになっており、今回の国会図書館の押収はこれに当たるとのことである。

昨年6月に発生した「松本サリン事件」でも松本市立図書館が同様の捜査を受けたのは記憶に新しい。

一般に図書館の利用記録は、厳密に考えるといろいろ危険をはらむもので、個人情報や図書館業務の目的以外に利用者本人の許諾なしに流用したり、外部に漏らすことはプライバシーの侵害に当たる。利用者は自由に資料を入手し、読書の自由が守られねばなりません。

\* \* \*

さて、本学図書館ではどの様にプライバシーが守られているのかをこの機会にご紹介して、図書館の裏側の苦勞を知って頂きたいと思いません。

まず毎日の貸出・返却業務は皆さんがご存じの通り、コンピュータ処理されています。

これらは処理画面を見ていると分りますが、各々の処理が実行されると書名・著者名は画面から消える仕組みになっている。

但し、統計業務のためにコンピュータ内には記録が残り、いつ誰が、どの本を利用したのかは係だけが分かる様になっている。

そして、この利用記録は保存期間1ケ年、つまり3月末には前述の記録はすべてコンピュータ内はもちろん、外部出力帳票も破棄してしまいます。

又、外部への文献複写申込書等は3ケ年で破棄、レファレンス記録も同様です。

なお、通常「延滞者呼出」をする掲示物も絶対に書名・資料名等を明記しません。督促状ハガキにも登録番号は印刷されますが、内容は出力しないよう配慮している。

この様に本学図書館でも細かい部分に留意した利用者のプライバシーを守るためのシステムがとられていますからご安心下さい。

利用者が“何でも自由に読める”ように図書館員は常時注意を怠らないように努めています。

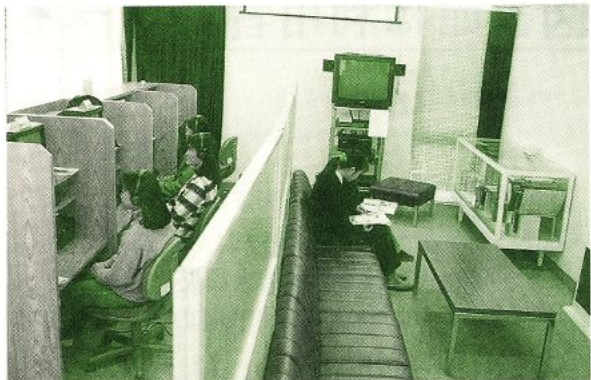
（長張）

## [図書館ニュース]

後期から本学図書館にもAVルームが誕生しました。

いままで2階閲覧室の一部分で視聴してもらっていましたが、今回独立したAVルームとなりました。ブラウジングルームと兼用ですが、遠慮なく利用して頂けるものと思います。

尚、飲食絶対禁止です。談話は結構ですが、あまり大声を出して騒いだりしないよう注意しましょう。



### 最近入った視聴覚資料 今年中に入った資料の中から人気のあるLDを紹介しましょう。



マイライフ (LD)

ジョーンズは末期ガンにおかされる。初めてのベビーが授かったというのに、宣告を受けて対面できないであろう我が子に父親としてビデオレターを撮り始める。



ビルマの豎琴 (LD)

ビルマ戦線で投降した水島上等兵は同胞の霊を慰めるため僧となり現地に残る。  
竹山道雄原作、中井貴一主演。



雨の朝パリに死す (LD)

アメリカ軍の中尉チャールズと娘ヘレンは恋に落ち結婚する。充実した生活の中からやがて……  
50年代エリザベス・テイラーの最も美しかった時の姿と評された作品。

〈CDを借りるときは、ケースを破損しないよう“小袋”を持ってきて入れていくようにして下さい〉

### 編集 後記

本年も早くも12月を迎え、例年の如く、図書館報「みすず」をお届けします。学長先生の若き日の愛読書や小林先生の「専門書にChallenge!」などの玉稿をはじめ、学生のみなさん・卒業生秋本さんの読書論など掲載できありがとうございました。(丸山)

### みすず

上田女子短期大学附属図書館報  
第22号 1995.12.発行

編集 上田女子短期大学図書委員会  
発行 上田女子短期大学附属図書館

〒386-12 長野県上田市下之郷620  
TEL. 0268-38-2352